

シノドスへの歩み 東京教区のこれまでの歩みを振り返る その一 1970年代の東京教区：神の民の教会へ

小西広志

2022年4月19日

はじめに

皆さん、こんにちは。東京教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日から動画の新しいシリーズとして、東京教区のこれまでの歩みを振り返るを数回にわたってお届けします。わたしたちの東京教区はこの半世紀どのように歩んできたのでしょうか？歩みを振り返ることで、何か見えてくるものはないのでしょうか。シノドスの教会とは、これまでの教会の小さな歩みの上に成り立っていくのです。

今日は、1970年代の東京教区を見てみましょう。

白柳誠一大司教

貴重な映像が残されていました。1964年12月8日の東京カテドラル聖マリア大聖堂の献堂式の記録です。丹下健三氏の設計によるこの聖堂は、新しい教会の始まりを予感させるものでした。ちょうど第二バチカン公会議の開催の頃です。

戦前の日本の教会を指導し、長きにわたり東京大司教区で牧者として働かれたのは土井辰雄枢機卿さまでした。第二バチカン公会議でも教会の改革を推進する司教たちと行動を共にしたと言われていました。カテドラルが献堂してから、6年後、1970年2月21日に帰天なさいました。まるで次の世代にバトンを渡すかのようにした。

新しく1970年4月29日に東京大司教区の司教として白柳誠一大司教さまが着座なさいました。新しい司教さまをお迎えして、東京教区は新しい時代を迎えたのです。

新しい教会への取り組み

もちろん、教会の改革が突然始まったわけではありません。1965年に第二バチカン公会議が終わってから、ほどなくして少しずつ少しずつ教会は変わっていったのです。

新しい教会への取り組みは、目に見える形で典礼の改革からなされました。それまでのラテン語によるミサ

から、日本語によるミサとなったのです。1969年11月30日、待降節第一主日より新しい式次第によるミサが実施されました。各教会で試行錯誤がなされていきました。大きく変わったのは司式司祭が会衆と向き合う形式でのミサとなったことでしょう。こうして、一つの祭壇を共に囲む信仰の共同体のミサが実現していったのです。さらには、手による聖体拝領も認められました。1971年11月29日のことです。

1960年代後半の時点で東京教区内の小教区は城西地区、城南地区、中央地区、城東地区、城北地区、武蔵野地区、千葉地区の7のブロックに分かれていました。その他にも各修道会の修道院が数多くありました。東京教区として一つにまとめることが大切になってきたのです。1969年ぐらいから東京教区大会を開催する気運が高まりました。度重なる準備委員会を経て、1970年1月18日に第1回東京教区大会を開催しています。記録によれば司教・司祭が77名、修道者46名、そして453名の信徒が参加しました。8の部会に分かれての討議がなされました。

8部門による討議

- 第一部会 政治・経済・社会問題
- 第二部会 社会福祉・相互扶助問題
- 第三部会 青少年・労働者問題
- 第四部会 布教問題
- 第五部会 広報問題
- 第六部会 カトリック学校問題
- 第七部会 教区・小教区問題
- 第八部会 千葉地区問題

人々と共に

1970年の時点で東京教区の信徒数は55,000人ほどでした。求道者は993人、その年の成人洗礼は1,213人、幼児洗礼は978人でした。すでに東京教区では数多くの慈善事業がなされていましたが、その多くは男女の修道会が中心でした。しかし、東京教区信徒使徒職協議会などが中心となって、信徒による社会活動も積極的になされました。また、公会議後は都内にあるキリスト教諸教会との連携も深められ、エキュメニカルな活動もなされました。当時はベトナム戦争の末期でした。唯一の被爆国として日本の社会は平和への希望を抱きました。それに応じるように、教会の中にも平和への運動が生まれていきました。数年におよぶ準備の期間を経て日本カトリック正義と平和委員会が生まれたのも1970年でした。東京教区では1973年には靖国神社法案反対のためのメッセージを発表しています。また、翌年より毎年8月には平和祈願の野外ミサを千鳥ヶ淵戦没者墓苑で行いました。これが現在の平和旬間へとつながっていきました。

布教から福音宣教へ

1972年には司教団より教書「社会に福音を」が発表されました。三つの点が強調されました。(1) み言葉を伝える、(2) キリスト教的あかしをする、(3) キリストの共同体をつくるの三つです。つまり、神の国のメッセージを日本の社会に伝えることの重要性が再確認されたのです。また東京教区としては教区全体のまとめ

と一致を求めていきました。同じ年の8月には東京教区ニュースも発刊されました。また、人口が増えつつある多摩地区に多摩教会が創設されたのもこの頃です。新しい福音宣教の可能性を探って、多くの司祭たちが街へと出て、山谷などで労働者の方々と共に働き、若い勤労者たちの悩みを聞き、学生たちとの対話を深めていきました。また、韓国の民主化運動に連帯する司祭たちもいました。公害問題などに積極的に関わる司祭もいました。また、この頃から結婚の準備をなさっている方々へのかかわりとして結婚講座もよく行われるようになりました。司祭や修道者だけでなく一般の信徒の方々も結婚講座の講師として奉仕してくださいました。

まとめ

70年代の東京教区を簡単に振り返ってみました。教会はまだ若く、力もあり、何よりも社会の中でイエスキリストの福音の価値観を生きていきたいという希望にあふれていたように思います。

東京教区大会について紹介しましたが、八つの部会に分かれて討議した内容は半世紀を経ても色あせないものです。聖職者、修道者、信徒が一堂に会して、それぞれのテーマについて話しあう姿勢は、後の「福音宣教推進全国会議」NICE-1に通じるものがあります。また、東京区では教区大会で話しあわれた内容をより豊かにし、深めていく努力をしていきました。こうして、東京教区大会をきっかけに東京教区総会が定期的開催されるようになっていったのです。